「手でみる彫刻コンペティション」について

企画者・高野いくの

「手でみる彫刻コンペティション」とは、その名前の通り「手でみて」審査するコンペティションのことで、審査員は目で見ることなく手触りだけで、作品を評価していく。このコンペは3年ほど前、今村さんとの何気ない会話から始まった。

私と今村さんは職場の同僚だ。仕事の内容は、大きく言うと障害のある方々の表現を世間に紹介をしていく活動をしていて、私たちは日頃から障害のある方々の表現やアートについてなどなど、豊かな雑談をしている。その時も仕事が終わり一息つきながら、なんとなくキュレーションってなんだろうと話をしていた。私たちは、障害のある方々の作品をキュレーションして展覧会を企画したりしているけれど、逆にキュレーションしてみてもらいたいね、となんとなく話していて、その流れから、障害のある人が審査をするコンペがあっても楽しいのではという話になった。

ちょうどその頃私は、アトリエみつしまで開催されていた「視覚に障害のある人・ミーツ・マテリアル」という、目の見えない人・見えにくい人と一緒に作品を制作していく連続ワークショップに参加していて、月に2回ほどアトリエみつしまに通っている時だった。見えない人・見えにくい人と何かすることは、伝え方や、それに伴う言葉の選び方、コミュニケーションの取り方など、初心にかえるような感覚があり、通うたびに、心の解像度が上がっている実感があった。そんなミーツ・マテリアルで知り合った人たちと、見える見えないに関係なく、何か楽しいことができれば良いなと、密かに思っていたことも相まって、見えない人・見えにくい人、そして見える人が同じ条件で審査ができるコンペがあっても良いのではという話になった。

今村さんもノリノリだった。そこから私たちの雑談はより豊かなものになり、見えない人・見えにくい人・見える人が、いかに同じ条件でフェアに審査をしていくか、話し合いを重ねた。なんのためにやるのか？というと、ただやってみたいからやる、というシンプルな情熱で、厳密なルールを設定して、課題文を作成して、協力してくれそうな方々に声をかけてみた。想像していたよりも人が集まり、1回目（2023年）は10点ほどの作品が集まり、審査員は15名ほど集まった。そのうち見えない人・見えにくい人が5名ほどいて、布をかけた作品を手で触りながら審査をして、各自が持っているポイントシールを琴線に触れた作品に投票していった。

やってみてまず感じたことは、審査の難しさだった。審査の基準がわからないのだ。目で見て審査するならば、見た目の美しさや、自分の好みの色合いなど、何かしらの選ぶ理由について言い訳が立つ。手で触るだけだと、なんだか良いなと思ってもその理由を自分の中で言葉にすることが難しく、私は少し自信が持てなかった。そのような気持ちは審査員それぞれ抱えていたようで、審査会が終わってからのディスカッションはお互いの気持ちを確かめ合うようなところがあり、盛り上がった。印象としては、見えない人・見えにくい人の方が見える人に比べて、言語化が上手で、話し合いの全体を引っ張っているようだった。盛り上がる話し合いの中で、コンペにしたことも良かったなぁと思っていた。ただの鑑賞ではなく審査にしたことによって、その場にいる全員が当事者となり、選ぶ責任のようなものを楽しめていたように思う。

こうして、豊かな雑談から生まれた、ただやってみたかったこの企画は、やはり豊かなものになった。そしてこの度、2年ぶりに2回目を開催することが出来た。審査会が終了してから記念写真を撮影してみた。全員なかなか良い顔で写真に納まっていて、改めてやってよかったと思った。